

目的 「家政学のパラダイム」ということが、最近いわれていゝが、その「家政学のパラダイム」について考察するに必要として、家政学のその総合性が、今日の人間生活の諸現象の解明への対応に有効であることを論証する。

方法 家政学領域で「パラダイム」という用語が導入された経過を辿ることにより、「家政学におけるパラダイム論」と「家政学のパラダイム」の混同をまず明確にする。次に、矢部章彦前家政学会長が、家政学の発展を「家政学のパラダイム」として提起されたことの積極的意味を評価し、そのことの客観的背景を、今日の家政学諸領域の動向によつてとらえる。家政学に隣接の諸科学の反省と問題点を検討して、家政学に展望を与える「家政学のパラダイム」を追求する。

結果 クーンが科学革命の構想を、パラダイム転換によつて説明したのがすでに20年余たった。その後、多くの分野で「パラダイム」という言葉が使われ、「パラダイム論」について論議されていゝのであつたが、「パラダイム論」と「パラダイム」は区別して論じられるべきである。わたしたちは、人間生活の諸現象での解明にとって有効な、家政学理論の構築という意味に於いて「家政学のパラダイム」という用語を使用していゝが、家政学のいくつかの領域での研究動向を分析した結果、それらの領域では、家庭生活を中心とした人間生活解明の学である家政学の、新しい「パラダイム」が、あつた領域ではすでに形成され、またあつた領域ではその形成が強く要請されていゝことが明らかになった。